

智湧了然の二義判釈について

弓 場 苗 生 子

中国天台宗の歴史を概観するに、北宋期に端を発する山家山外の論争は、南宋の時代に至っても依然少なからぬ余波を残したと言える。山家派の門流はその領袖たる四明知礼の没後、いくつかの分派に別れることとなった。智湧了然（一〇七六—一一四二）はこのうち神照本如の系統に連なる学匠であり、知礼から数えて四代目の法孫に当たる。その所著としては、山家派の後裔としての立場から伝慧思撰『大乘止観法門』に註釈した『大乘止観法門宗円記』（以下『宗円記』）五卷、また『十不二門』を解説した『十不二門枢要』二卷が伝わっている。⁽¹⁾

了然の所説においては、克実・随名、所依・当体、功帰・就法等、二句一対の異なる判を立てて、それらに基づいて解釈する例が頻繁に見受けられる。これらの両の観点による判釈は、いずれも差別・無差別の相即等の一見矛盾する命題を会通することを目的とし、またこれらの二からなる判釈は、概ね理体と事用との対比関係に属するものと言い得る。そも

そも、判釈に際して体用義を重視するのは、どちらかといえは山外派の学匠に顕著な傾向と言えるが、了然における体用相即の理解はこれらの諸師ともまた異なるもののように思う。小稿では、このような二義判釈が当人の如何なる思想を反映したものであるか、了然の著作に見えるこれらの判釈方法の類型に対する検討を通して考察を加えたいと思う。

まず、了然が二義の判を用いて説く「体」の解釈について、例に随って確認したい。『十不二門枢要』巻上には次のように見える。

己心之体、有_レ随名辨_レ体、有_レ克実論_レ体。若随名辨_レ体、即是生
 仏・依正・色心、名下所詮差別之体。其差別者、有_レ生有_レ仏、有_レ
 依有_レ正、有_レ色有_レ心、各各有_レ体。若克実論_レ体、則衆生与_レ仏、
 依正・色心、同一真性而為_レ其体、実無_二差別_一。今云_二色心体絶_一、
 者、乃是随名辨_レ体、此体可_レ絶。若其克実論_レ体、体何可_レ絶。祖
 師云、非_レ謂_二空無_一心体。然生仏・依正、差別体絶者、功用_二三觀_一、
 妙故方_レ絶。何者、以_レ了_二生仏・依正・色心即空假中円融妙_一故、
 能絶_二於差別妄体_一。妄体既絶、実性斯彰。故曰、惟一実性、無_二空

仮中⁽²⁾。

ここに見えるように、了然は随名・克実の両判によつて「体」という語の有する二つの意味を挙げている。まず、随名の観点によるならば、体とは生仏・依正・色心等の二辺に代表される差別の諸相であり、その一つ一つが体を有するということになる。対して、克実の判に寄せて体と言う時は、諸々の差別相が帰するところの、無差別の同一真性がこれに当たる。さらに続けて、随名の体は断絶されるべき有差別の妄体であり、この体が滅されたとき実性の体、すなわち克実の判でいうところの体が現れると明かしている。

また、『宗円記』卷三には、法身について在障・出障の義を釈するに際し、次のように二判を用いる例が見える。

問、何故今文論^二障出^一、惟就^レ事辨、不^レ從^レ性耶。答、性之染淨、与^二事染淨^一、体同義異。今從^二義異^一、不^二就^レ性辨^一。何者、由^二性之染淨既是性^一故、故体融一味。雖有^二二名^一、其实一体。不^レ同^二事中^一*灼然二体^一……

問、既有^二随名辨^レ体^一、且性染・性淨二名、豈無^二随名之体^一。何故但^二事中^一有^レ体。答、性之染淨名、随名辨^レ体者、染淨二名、名從^レ事得。随名辨^レ体、体還是事、但約^二義異^一。以^二性染淨義異^一於事^一故、性染淨二名、名下之体、体是於^レ性。既是於^レ性、性則真実、故非^二二体^一。所以得^レ云^二体融一味^一。如^レ此還成^二克実論^一体。
(*灼——原文には炮につくる、ここでは文意に随い改めた。)

まず初めの問答では、性の染淨と事の染淨とが体同義異の

智湧了然の二義判釈について(弓場)

関係にあることを明かし、性の染淨が体融一味の一性であるのに対して、事中の染淨は明瞭に可数の差別相を有するとしている。続く問答においては、たとえ性の境界であろうと染淨という名がある以上、随名の体が存することを免れないのではないかという問いに対し、性の染淨の名は義異、すなわち随名の判によるものであり、克実に従えば二名があるとはいつでも二体はなく、体融一味と言い得るのであると答えている。従来の山家義によるならば、事における差別はそのま性における差別であるとする当体全是の相即義に基づいて、性の境界においても差別相が宛然と具わると説く。しかるに、了然は差別の当体の体と一性の体とはその指すところの内容を別にするものであり、克実の観点による以上は、性における差別は存さないと説くのである。

ここまで見てきたように、了然が言うところの「体」とは判釈の違いによつて二種の意味があるということになるだろう。まず、随名の判においては体とは差別相各々の「当体」であり、その数もまた法相の多寡に随うものである。これに對して克実の判では、妄情の諸法差別を超越した一性のみを体とする。すなわち、随名・克実の二判を用いるとき、兩者の間には一多・真妄の対比関係が意識されているようである。このように二判を設けることによつて一性と差別相との対立を説く了然の立場は、いわゆる攝相歸性義と近似するも

ののようにも思われる。この点については了然自らも認める
ところであつたようで、『宗円記』巻五においては、三諦三千
の差別義への偏向を強めた当時の山家派における悪風を戒め
る必要から、本書では敢えて一性の辺を殊更に強調するので
あると述懐している。⁽⁴⁾ また、同巻三では『大乘止観法門』の
「蓋由相無自実、起必依心。心体既融、相亦無礙也。」と
いう箇所^下に註釈するなか、以下のように問答を立てる。

問、与昔人云^二撰^レ色^レ歸^レ心^レ方具^一、何別。答、一者、言同意別。二
者、言意俱別。且言同意別者、若取^二妄^レ之^レ色^レ心^一、俱名^レ為^レ色^レ。真之
色心、俱名^レ為^レ心。亦得^レ謂^二之^レ撰^レ色^レ歸^レ心^一、其色方具。若言意俱
別者、須^レ知、天然一性、不^二名^レ為^レ色^レ、不^二名^レ為^レ心^一。附^レ世仮立、
曰^レ色^レ、曰^レ心。若以^二天然一性^一名^レ心、則撰^二妄^レ之^レ色^レ・妄^レ心^一・歸^レ心、
其色心方具。是故不^二独撰^レ色^レ歸^レ心^一、亦乃撰^レ心^レ歸^レ心。若以^二天
然一性^一名^レ色、則撰^二妄^レ之^レ色^レ・妄^レ心^一・歸^レ色、其色心方具。是故不^二
独撰^レ色^レ歸^レ色^一、亦乃撰^レ心^レ歸^レ色。此約^二撰^レ事^レ歸^レ理^一、其事方具。
功歸^レ在^レ理、就法^レ在^レ事。若直從^二就法^一而辨、則妄^レ心亦具、妄^レ色亦
具。不^二必云^中撰^二色^レ心^一・歸^レ心^一、撰^二色^レ心^一・歸^レ色^一。此之^二二義^一、随^レ説
不^レ同、旨在^二一時^一。⁽⁵⁾

ここに取り上げられる「昔人」の説とは、主に源清の『十
不二門示珠指』の所論を指して言うものと思われる。⁽⁶⁾ ここで
了然^上は自説と山外派説との相異について、言同意別・言意俱
別の二点に約して次のように説明する。まず、言同意別とい
うのは、自らの取るところによるならば、妄の色心はそのい
ずれもが色と呼び得るのであり、同様に真の色心はいずれも

が心の範疇である。このように真妄の別は照らすところの観
点の違いによつて生じるものであるが、これもまた妄情を離
れて真心に歸し、はじめて色が心に具わるという意味で、言
葉の上では山外義と同様であると言える。次に、言意俱別と
は、ここで言う天然の一性とは色心の別を超越したものであ
るため、この一性と色心との関係は功歸・就法の両観点に照
らして自在に説示し得る。したがって、色心の二者において、
一方の心の義のみを重視する山外説とは全く異なるものであ
る。

その他、『宗円記』巻四には自らの立場と山外派説との相
異を説いて次のように言う。

文云^三本性具^一足寂用二義^一者、具^レ寂是具^レ体、具^レ用是具^レ相。若
祇以^二中道之体^一為^二能具^一、染淨二性為^二所具^一、恐違^二此文^一。何者、
今文指^レ寂為^レ体、既云^三本性具^一足寂用二義^一、故本性是能具、中体
亦所具。同^下荆溪云^丙本謂^二一性^一、具^レ足自他^甲。故自行之体亦為^二所
具^一。彼宗因^下以^二中道^一為^二能具^一故、指^二空中^一為^二理総^一、俗諦為^二事
別^一。豈知^下荆溪云^丙総謂^二涅槃^一、別謂^二三徳^一。⁽⁷⁾

ここで了然は、中道を能具、染淨二性を所具であるとする
見方を斥け、実には本性が能具であり、ここにおいては中道
の体もまた所具に他ならないと主張する。同様に、山外派が
説くところの唯仮三千の説によるならば、空・仮・中の三諦
の中には理総である空・中と事別に当たる仮という二分が存
することになるが、湛然が『法華玄義釈籤』巻八において総

とは涅槃、別とは三徳を指すと明かしているように、三という数から成る以上は三徳もまたそれ自体が差別相であると説いている。⁽⁸⁾つまり、了然においては一性の側面と差別の側面とは厳然として分けられるべきものであり、理総事別を重視する点では山外義と同様であるが、彼らの如く色心や三諦等の内部において理事の二分を設けることはせず、飽くまでも照らすところの判釈によって理総と事別との対比が生じることとなるのである。

以上、了然の解釈における思想的特色について、二義判釈を用いる例を中心に確認した。その所論において、具相家説と具性家説を並び評した上で、そのいずれとも異なる独自の立場を打ち出さんとする意図が見受けられることは、既に先学の指摘するところである。⁽⁹⁾先に触れたように、了然が一性を強調した背景には、当体全是の具相義に傾倒する山家の門徒らに対する危機感が窺われる。了然による二義判釈は、こうした宗内における偏向を正すために、一性義を山外派とは異なる形でもって取り入れることを試みたものと言えるだろう。

- 1 了然の思想を扱う先学の研究としては、安藤俊雄『天台思想史』（法蔵館、一九五九年）、池田魯参『大乘止観法門』研究序説』（駒澤大学仏教学部論集）五、一九七四年）、大松博典

智湧了然の二義判釈について（弓 場）

「智湧了然と宋の天台」（『印度学仏教学研究』第三〇巻第二号、一九八二年）等がある。

2 統蔵二一五・一一八丁左。

3 統蔵二一三・三九八丁左。

4 問、一性之語、亦通此記。前後何以一性一性為一耶。答、此記前後之一性者、乃是三千即一之性。所以惟円。為患下学二山家一者凡談二円性一惟執三三諦三千一而不本二於師祖之意一故、以一性一而導三達之。後人其或惟執一性一、必須下後以三三諦三千一而導三達之上。然三千・一性、殊名而同レ体。無三惟執レ名以失二円旨一。（統蔵二一三・四二二丁右）

5 統蔵二一三・四〇一丁右。

6 『四明十義書』には『十不二門示珠指』の所説を「撰レ色帰レ心」と評する例が散見される。大正四六・八三七頁中等。

7 統蔵二一三・四〇九丁左。

8 所引の『法華玄義釈籤』巻八の文は大正三三・八六九頁。原文には「一謂二涅槃一、三謂三三徳」とある。

9 安藤氏前掲『天台思想史』一五三頁—一五七頁参照。

〈キーワード〉 山家派、『大乘止観法門宗円記』、『十不二門枢要』、一性、理総事別

（早稲田大学大学院）